

井原遺跡群 V

—オオカワラ地区発掘調査報告—

前原町文化財調査報告書

第 24 集

1986

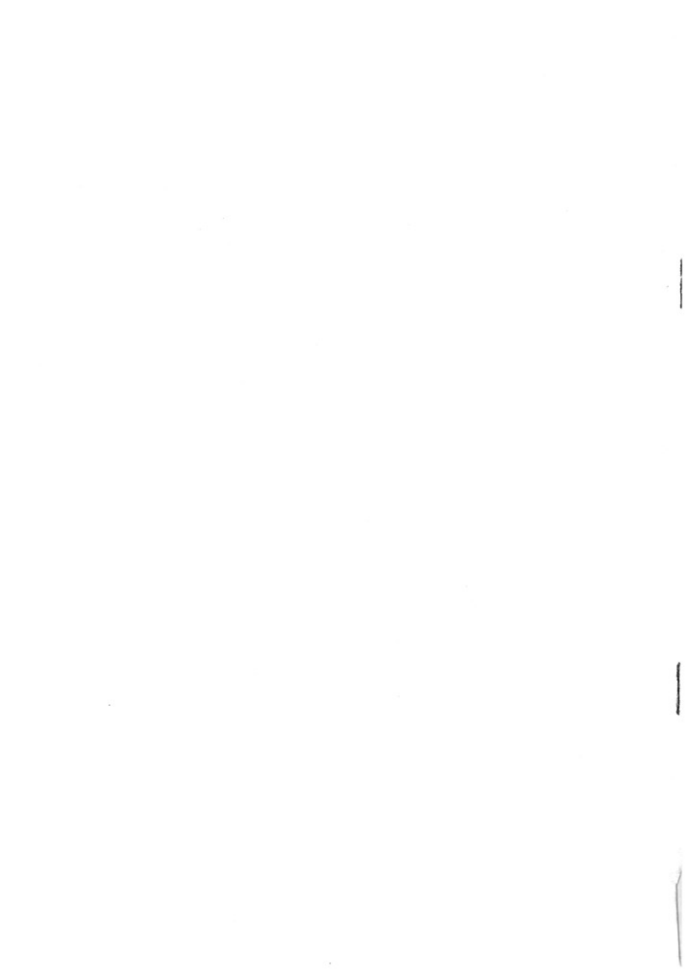
前原町教育委員会

井原遺跡群 V

—オオカワラ地区発掘調査報告—

前原町文化財調査報告書

第 24 集



はじめに

本町では、昭和60年度より、『緑ゆたかな田園都市～前原』の創造をめざして、事業を「伊都の国ふるさとづくり事業」と名づけ、実施しております。

その一環として、魏志倭人伝にみられる伊都国の中心地と推定されている三雲、井原地区にほど近い、旧怡土中学校（現前原東中学校）跡地に、歴史資料館を建設し、より多くの方々に、我が町の歴史に触れていただきたいと考えています。今回の発掘調査は、この計画に伴って止むを得ず削平することとなった部分について実施したものであります。

本書が、私たちの郷土の歴史を明らかにするひとつの手がかりとなり、さらには、私たちの大切な財産である文化財の保護・保存のための一助となれば幸いです。

最後に、今回の調査に際して、理解と協力をいただきました地元をはじめ関係の方々から感謝いたします。

昭和61年3月31日

前原町教育委員会

教育長 河原吉美

例 言

1. 本書は、昭和60年度伊都の因ふるさとづくり事業の中の、歴史資料館建設に伴ない、昭和60年9月4日から17日までの間実施した埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 本書に用いた地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図および前原町都市計画課保管図から作成した。
3. 遺構の実測は、岡部裕俊・林 覚が行い、写真撮影は、岡部裕俊が行った。
4. 本書の執筆・編集は、林 覚が行った。

本文目次

| | 頁 |
|-------------------|---|
| I. 調査にいたる経過 | 1 |
| II. 位置と環境 | 2 |
| III. 遺構と遺物 | 6 |
| IV. むすび | 8 |

挿図目次

| | |
|--|---|
| 第1図 発掘調査作業風景 | 1 |
| 第2図 周辺の遺跡 (1 / 50,000) | 3 |
| 第3図 発掘調査地点 (1 / 5,000) | 4 |
| 第4図 オオカワラ遺跡基本層位図 (南側セクション, 1 / 60) | 7 |
| 付 図 オオカワラ遺跡遺構実測図 (1 / 100) | |

図版目次

| | |
|-----------------|--|
| 図版1 調査区全景 (東から) | |
| 溝1 | |
| 2 自然河道西半 (南から) | |
| 自然河道東半 (南から) | |
| 3 自然河道東半 (北から) | |
| 自然河道西半 (北から) | |

I 調査にいたる経過

北部九州は、大陸との距離が近いというその地理的条件から、大陸文化の入り口として栄えた地域である。その中において本町は、いわゆる魏志倭人伝に登場する「伊都国」の地として注目されており、三雲、井原遺跡群をはじめとして、多くの重要な遺跡が存在し、その貴重な出土品なども相当量に達しているのが現状である。

現在、本町には、昭和29年に実施された志登支石墓群の発掘調査によって出土した遺物を収蔵するための「志登支石墓群出土物収蔵庫」があり、この施設に他の遺跡出土の遺物も含めて、「前原町立伊都国資料館」として公開している。しかし、前述のような状況のもとで、増加の一途をたどる資料を収蔵、展示するには現施設では手狭となり、「伊都国」の歴史を知るうえで貴重な資料のうちかなりの量が公開できない状態である。



第1図 発掘調査作業風景

この状況を打開し、できるだけ多くの貴重な資料を整理し、公開するために、新しい資料館が待望されるにいたった。こうして、本町に県立資料館を誘致しようとする運動が起ったのである。しかし、最終的には県立資料館の建設は見送りとなり、かわって、町立資料館建設の計画が立案されたのである。

町当局は、「伊都の国ふるさとづくり事業」として、歴史資料館・怡土校区公民館・文化財復元室を、旧怡土中学校（現前原東中学校～移転）運動場跡地を利用して建設する計画を発表し、同時に、建設予定地の埋蔵文化財発掘調査について、教育委員会との協議に入ったのである。

建設予定地の旧運動場は、旧地形を削平して整地されており、既に埋蔵文化財は消失している可能性が高く、また、客土による整地が行われるため、埋蔵文化財に対する影響はないと考えられたが、建物の配置の関係で、遺構が存在する可能性の高い隣接する水田を一部削平する計画であったため、その部分について発掘調査を実施するという結論に達した。

この地域は、「伊都国」の中心とされる三雲・井原遺跡群と中型河川をはさんで隣同士であり、また、以前に行われた付近の試掘調査でも弥生時代や古墳時代の住居跡が検出されたいきさつもあり、調査担当者としては予定地のできるだけ広い部分に対して発掘調査を行いたかったのであるが、町当局の「昭和61年秋までに是非竣工させたい」という意向があり、協議した結果、建物によって削平される部分についてのみ調査を実施することとなり、また期間についても、昭和60年9月4日から中旬ごろまでと決定したのである。

今回の調査の組織は次のとおりである。

調査主体 前原町教育委員会

| | | |
|----|-------------|------|
| 総括 | 教育長 | 河原古美 |
| | 社会教育課長 | 野口治三 |
| | 文化係長 | 吉村耕治 |
| 庶務 | 社会教育課社会教育係長 | 徳重 認 |
| | 主事 | 久保静代 |
| 調査 | 文化係主事 | 川村 博 |
| | 主事 | 林 覚 |
| | 主事 | 岡部裕俊 |

調査・整理補助

石井扶美子（別府大学考古学専攻卒）

調査作業員

杉チズ子・八木ヤスノ・本田タツ子・菊池直子・野村松江・小金丸利枝・中村直美・原野
スミ・藤木綾子・徳永美根子・田中洋子・笠ふさ子・樋口ミサヨ・柳原キミ子・占田大八郎

II 位置と環境

オオカワラ遺跡は、前原町大字井原字オオカワラ877番地の1他に所在している。

遺跡は、瑞梅寺川の支流である川原川と赤崎川に東西をはさまれた、標高40m前後の、瑞梅寺川をはじめとする背振山系に源を発し北流する諸河川によって形成された扇状地上にある。

赤崎川をはさんだ対岸は井原松井地区で、昭和59・60年度の県営ほ場整備に伴う発掘調査によって、弥生時代・古墳時代を中心とする住居跡や溝などが確認された地域である。さらにその西隣には、井原遺跡群・三雲遺跡群など、昭和49年以後の県営ほ場整備に伴い、福岡県教育委員会や前原町教育委員会が実施した発掘調査によって、弥生時代・古墳時代を中心とする住居跡や墳墓群などが広範囲にわたって確認された地域があり、三雲南小路遺跡や井原窪溝遺跡という「王墓」級の墳墓の存在から、「伊都国」の中心部として最も注目されている地域である。オオカワラ遺跡は、これまで井原遺跡群としてきた地域とは川でへだてられているが、大字井原でもあり、また位置的にも井原遺跡群の一遺跡として捉えてさしつかえないと考える。

三雲・井原遺跡群の西には、約3kmにおよぶ細長い舌状台地が北に向かって伸びている。通称「曾根丘陵」と呼ばれるこの台地上には、5世紀を中心として4世紀から6世紀にかけての墳墓群が存在している（一部消失）。平原遺跡（方形周溝墓、円形周溝墓）、ワレ塚古墳（前方後円墳）、銭瓶塚古墳（前方後円墳）、孤塚古墳（円墳）、先山古墳（前方後円墳・消失）、高上



第2図 周辺の遺跡 (1/50,000)



第3圖 発掘調査地点 (1/5,000)

大塚古墳（円墳？・消失）がそれらである。

このうち、平原遺跡は4世紀の墳墓とする考え方が一般的で、ワレ塚古墳・銭瓶塚古墳・孤塚古墳は5世紀に、先山古墳は6世紀に位置づけられる。（高上大塚古墳については不明）

先に述べた三雲・井原遺跡群には、端山古墳・築山古墳・茶臼塚古墳（消失）の3基の古式前方後円墳が築かれているが、5世紀代になると場所を曾根丘陵に移して営まれるようになる。すなわち、曾根遺跡群は、5世紀代以降、三雲・井原一帯を掌握していた首長たちの埋葬地として成立した遺跡群なのである。

高祖山は、遺跡の東方に位置している。山の西側斜面には、756年から13年間かけて、大陸や朝鮮半島に対する防衛拠点として、怡土城が築かれた。現在、山麓の標高40m前後の場所には土塁が廻っており、その内側（郭内）には、望楼跡の礎石などが遺存している。また、この地は、中世には、糸島地方を支配した豪族原田氏がその本拠地として高祖城を築いた地でもある。

遺跡の南約1kmのところには、6世紀の円墳である古賀崎古墳がある。同古墳からは、馬具や須臾器がまとまった形で出土している。

糸島の平野部には、主な河川として瑞梅寺川と雷山川が北流し、それぞれ今津湾（博多湾）と加布里湾に注いでいる。背振山系に源を発する両河川は、ほぼ平行して流れるが、標高5m前後の低地に至って流れを変え海に向かう。

雷山川が東へ大きく流れを変えるところ一帯が志登遺跡群である。

この遺跡群は、朝鮮式磨製石鏃などが出土した弥生時代前期の志登石墓群を中心としており、ほ場整備に伴う最近の調査によって、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。

さらに、この志登遺跡群の北側一帯は、東の今津湾と西の加布里湾をつなぐ「糸島水道」が存在していたといわれている地域である。しかし、同地域に対する最近の調査結果などを見るかぎりでは、「糸島水道」が確実に存在したといえる積極的な資料は見られず、逆に、志登神社周辺で弥生時代の住居跡が確認されるなど、その存在については大いに疑問である。

また、志登遺跡群の西約1kmのところには、弥生時代後期の小銅鐸が出土した浦志遺跡がある。

Ⅲ 遺構と遺物

今回の発掘調査面積はおよそ355㎡で、発掘区は南北11.5m・東西約33mの長方形を呈している。この範囲は、資料館建設に伴い、前平される部分である。

調査の結果、調査区の西端部に一条の溝状遺構と、自然河道の流路跡を検出した。

溝状遺構は、幅約30cm～100cm、深さ約5cm～20cmで、長さ約5.2mにわたって検出した。溝の両端は西測と南側の調査区外につづいており、全体の形状を確認することはできないが、調査区内において、「L」状に屈曲している。溝底の高さから、水は北から南へ流れていたと考えられ、埋土は砂礫を多く含む青灰色土である。ここからは遺物は出土しておらず、時期を確定することはできないが、この遺構は、後述する自然河道を検出した面よりも一段高い所にあり、この部分は耕地拡張などのために造成されたと考えられ、そこに廃水用の溝を設けたのであろう。

自然河道の流路跡は、幅11m・4m・2.5mの3本を検出した。3本の河道は、調査区内で合流し、一本となって北流していたとみられる。合流地点には、浅瀬になっていたとみられる高まりが2ヶ所みられる。調査区内の3本の河道のうち、いちばん東側に位置する幅約11mのものが河底も深く、主流であったと考えられ、他の2本が合流して、この主流に流れ込んでいたようである。

調査区の基本的な層位は、上位から、表層（耕作土層）・黄褐色粘質土層とつづき、これより下層の2層が自然河道内の層位となっている。すなわち、その2層は、上位より、やや砂が混入した暗灰色土層と灰白色砂層である。この層位は3本の自然河道ともにほぼ同様である。

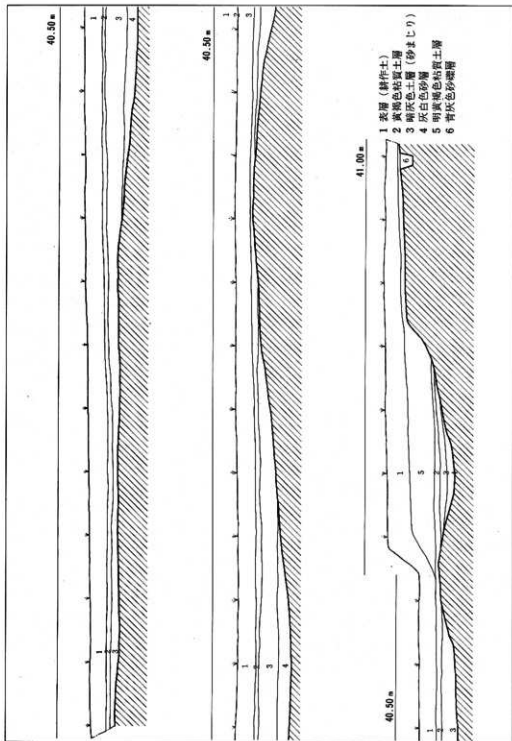
現在、調査地点の東約20mのところには、瑞梅寺川の支流である川原川が北流しており、今回検出した自然河道が流路変更しながら現在の流れとなったか、または、川原川に注いでいた河川が、その流れを止め埋没したものとみられる。

自然河道の埋土中からは、弥生式土器片、古式土師器片、須恵器片、糸切り底を有する土師器片など、弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。

しかしながら、自然河道という遺構の性格上、全ての遺物は、細片であり、また、流水による磨滅が著しく、実測にたえるものがなかったので、図示しなかった。

したがって、この河道の存在時期や埋没時期についても、明らかにすることはできなかった。

今回の調査地点は、ごく限られた範囲であったため、自然河道の存在を明らかにしたのみであった。しかし、埋土中からの出土遺物から判断して、この地域にも、幅ひろい時代にわたっての生活遺構の存在することは想像に難くない。



第4図 オオカワラ道路基本層位図 (南側セクション、1/60)

IV むすび

これまで述べてきたとおり、今回の調査は、資料館建設に伴って削平される部分に対してのみ行った。そして調査区の南側部分は駐車場等に利用するため、地下部分については現状保存ということで調査を実施しなかった。

しかし、この地域が三雲・井原遺跡群との関連で注目すべき地点であることや、今回の調査の結果をみると、今後、この地域に対して調査が実施されることがあるならば、水の流れとそれを利用して生活していた人々の姿が明らかにされるものと考えている。

版 圖



調査区全景 (東から)



溝 1



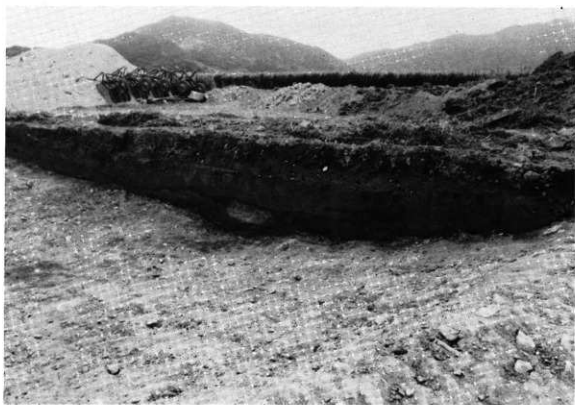
自然河道西半 (南から)



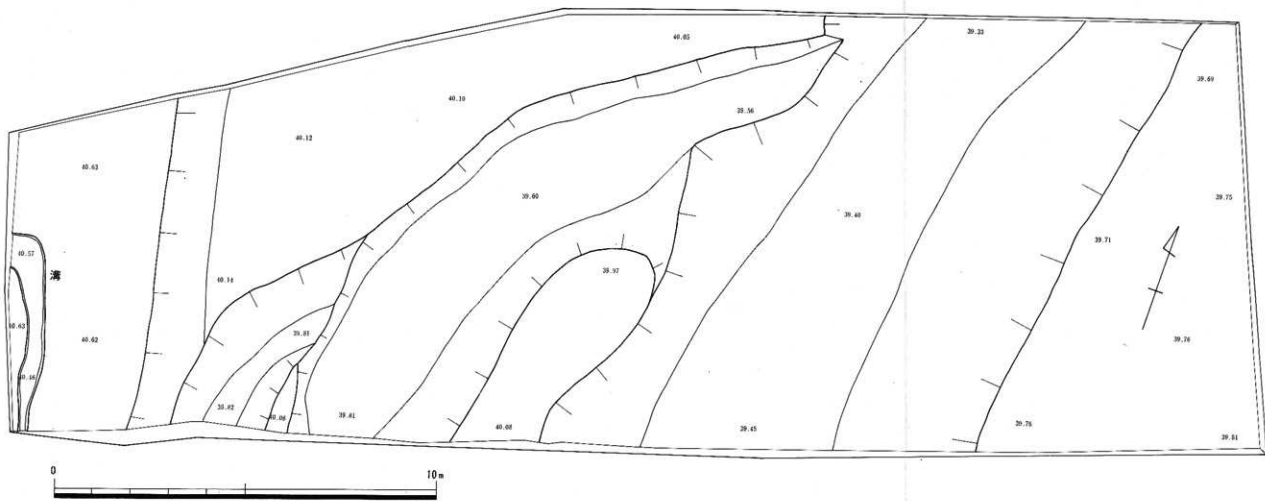
自然河道東半 (南から)



自然河道東半 (北から)



自然河道西半 (北から)



付図 井原オオカワラ道跡遺構実測図 (1/100)

井原遺跡群 V

オオカワラ地区発掘調査報告

前原町文化財調査報告書

第 24 集

昭和61年3月31日

発 行 前原町教育委員会

福岡県糸島郡前原町大字前原623

印 刷 株式会社 川島弘文社

福岡市東区粕崎ふ頭6-4-4



